

はじめに

美学を「アップデート」する？ それはいつたい、どういうことなのだろう？ アップデートで
きるということは、「美学」というのは一種のアプリ、プログラムのようなものなのだろうか？

大学の専攻名や講義名となっている「美学」とは、もともと哲学系の学問分野のひとつである。
一八世紀から現代に至る西洋哲学の知識がベースとなっている場合が多い。けれどもそれは美学と
いう語の、いわば制度的な側面だ。それはそれでかまわない。だが他方、より本質的な意味におい
ては、美学とはある種のプログラムであると断言してもいいのではないかと、私は考えている。た
だしプログラムとはいっても、特定の機能を実現するアプリの一つではなく、その上で様々なアプ
リの作動が可能となる、AndroidやWindowsのようなOS（オペレーティング・システム）に相当
するもの——それが美学ではないかと思う。

OSであるということは、美学とは新たに学ぶべき知識内容というよりも、いわば誰もが初めから備えている、認識の基本的体制の一部であることを含意する。もっとも多くの人は、自分が「美学」を持っているなどと意識することはないだろう。それはちょうど、私たちが特定のアプリを使っているとき、その作動を縁の下で可能にしているOSのことを意識しないのと同じようなことである。けれども私たちは、芸術作品などの美的対象についてばかりではなく、生活や仕事で会う日常の事柄についても、理屈を超えた感性的判断を絶え間なく行っているのである。合理的な推論によって到達した（と信じている）結論が、実は直感的判断に誘導されていることも少なくない。そうした直感的判断の作動を可能にしているのが、OSとしての美学である。

ふだんは気づかないOSの存在を意識するきっかけとなるのは、たとえば新しいアプリが上手く動作しなくなった時である。そうした時に、OSをアップデートする必要があると感じてくるだろう。それと同じように、私たちが自分の中の美学を意識するきっかけとなるのは、それまで当然と思っていた自分の感覚やそれに基づく判断に疑いや迷いが生じたり、自信を失ったりする瞬間である。理屈は言葉だから間違うかもしれないが感覚は直接的なのだから間違いようがない——本当にそうだろうか？ たしかに、朝から晩までスマホやパソコンの画面に向かっている生活では、自分の判断について疑ったり迷ったりする余裕はなくなっていくかもしれない。現代多くの人が囚われているそうした環境の中では、自分の直接的感覚がいちばん確かだという意識に、私たちは誘導されやす

い。

けれどもそうした生活は、実は本当の意味での直接的感覚の世界に生きているわけではないのである。そうではなく、流れてゆく大量の情報に対して自動的に反応するように、条件付けられているだけなのだ。そうした条件反射を自分の直接的感覚、直感だと勘違いしているにすぎないのである。それに対して美学を意識するとは、そうした反射の流れを減速あるいは停止させること、反射^{リフレクス}を反省へと導く別な思考の流れを作り出すことを意味する。とはいえ従来の美学の教科書だけでは、必ずしもこうした流れを作り出すことが容易ではない。西洋近代哲学に由来する抽象的な概念装置の手触りが気になって、私たちの直面するリアルな問題を考えるためにそれらをどう使えばいいのか、マジメに勉強しただけではよく分からないからである。そこで本書では、既存の美学的概念を参照することは必要最低限にして、様々な問題に関して日常の言葉で美学的思考を実践してみせることを試みた。それがうまく行っただろうかはさておき、これが私の言う「アップデート」の意味である。

そういうわけで、この本はふつうの意味では美学の入門書ではない。

入門書というのはいざいざ、「〇〇とは？」という問いに答えること、つまり定義から始まる。最初に定義があると安心する人もいるかもしれないが、安心してしまったらその先に進めないではないか、というのが私のスタンスである。では入門書でないとしたら応用編なのかというと、そう

いうわけでもない。この本を読むために、何らかの基礎知識が必要というわけでもないからである。哲学的な用語（ジョーザン）について分かりやすく解説すると「勉強した」という気分になって、やはり安心する人がいるかもしれないが、それも私はしたくない。専門用語的なものをできるだけ使わずに、誰もが知っている言葉を使って思考してみせるというのが、そもそもこれまで私がものを書く際の、基本的な方針であった。それは、何気なく使っている言葉にもっと敏感になること、いわば日常言語への感受性をアップデイトすることである。この方針はこれからも変わらないと思う。この本を読むために唯一必要な条件があるとすれば、それは手っ取り早く知識を得て満足する態度を捨て、迷うこと、考えること自体を楽しむ、面白がる余裕を持つということである。心の働きを活性化する反省的思考の楽しさ、面白さを共に経験することこそが、美学のアルファであり、オメガだからである。